大成會席

謝肉祭の夜

後編

遠13
1707
9

横相新
参考
聚傳

人

伊へ 13
ラ部 1707
巻 9

序

弟子口法華を沙法華と名付て新訳
大乗の経典を翻せり是国人
建茶辨茶の新と必ずを敬ふ
四月歌さ称ず 仏机有り如来
茶後を冥ずるを以て ぞを生ず
雨ふるを明らかめく除疑有り
解ずるぞ小さく字を留ず正道を心

爰に一つの祈ゞ神明の御誓を
我洲國の神祇に祈申ふ一の願
ゝ所ゝ中に清の
高昇を宮
及さ涼ゝ
張大船
ゝ
ゝ
ゝ

斗八二

あくびの寄合　文扇

高人　いくびの寄合ロ〳〵　笑人　コリヤいくびとのおごのおこびハ何の為
どどや　高人　ハイ　コレハさりまのあくびでござりまんこそよう仰せ
蓑のあくびとおされまを　笑人　まゝあんべどや　高人　そろぞんへ
てハイ指図を致しませう　笑人　ハ　おごの行方のあくびや　高人
ハイ〳〵　こゝハ今指箱のいくびでござりまんちとあくびをする上
よおざりまん　笑人　あちらの落ハ　高人　ハイ　義屋敷方の所
くび　笑人　どゝぞんこゝハ何所〳〵　高人　ハイ　九〻ん〻の依
弟屋〳〵出まん

第三

おだこ姫

雪經

所は都の東堀でもなく近き頃ほとりのでんらたびとも柳おそめと親戚も思ひ彼でんちよつくえ猿さを姫と月合せんと日がくを為うみ姫よそくと云ふを母釈いあるこ出さふとはてがよ合ひやまうその姫よ盃にして婚礼のおさあきまうよんと思ひ姫ひらまふ

ひやうおさびしふまふ日ごの御ちすとおるみえて捨られた母おいのよいたんやそ社方はとて日出ふ日ーやごうこうみい何ちさびしふと尋られべむこめげりふまでもうへ

むをよのぞくとおいてあるとうふこ

第四

正直

可光

浪花うへ町のあるが男子と耳おや二人ひとりなるが四人扶ひよりの日暮よ過りそさんめじが後ふとひるをておやヤりるハ藤よ百万ぐんがる面おくり猫ぐ来る酒まぐらくなんでおんとうをを収びぬるがおそぐく後ーふとうくふふとうをを思られば邪ぬて余りひま入りるとどなりのいぐちへおさ戸の君より月をのぞけばせあ念仏也へ彼ふいなんて我家へ戻るてあやおどろきけるとるめまべ藤ハまれ

がもと仕まのもと門口へ引てあるやあまきのあるさ

オス　　松尚

根ぶかもちら所よ松茸のんどう出さの月りや屋風出しと出てみ

ごぞ　ちさ　ぶど　中居　ヲ　ちらとんぶ　ぶ　ちすぶ　てその内

ちち　野　を　ち　ま　ま　ん　ぶ　ち　ぶ　ぶ　ち　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

きちん　海　鮒　で　ぶ　ち　ま　ん　客　ぶ　れ　ん　ぶ　ち　ま　の　中居　ハイ

今　揚　ち　ん　来　て　ち　ち　ま　ん　風　ち　ま　浦　ち　ち　び　ち　ま　れ

ま　せ　ん　ち　と　ち　ま　客　ま　ん　ち　や　ち　ち　ち　と　ち　ま　ち　彼　男　中　浦

出　い　ぶ　ち　ち　ち　ち　ち　出　ぶ　ち　ま　れ　ま　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

おり　ち

く　ち

合　ち

ま　ち

こ　ち

の　ち

十七　　十八ム

遊来のちびづ　ち

月出さと　ち

ゑびすこ湯もりの社頭まで出あるく中のおかしらよ
極まりの檜ぶいなんぞ出ちゞまらく ちり紙こもまれ代く
のかぶるあるて上方ものゝ檜ぶいまゝ俳りの月雪や
おなぐ京番をいつとう和なくも祇中よてゝ右近と呼れ者名
うる家の紋おまも付ものが芸妓遊の下ゝ長ゝ長ゝが
ゝ紋をとうるゝあくゝ三方ゆてあくゝ長ゝ家的付るぜく

代 泳 梅九

名遠ありて一ゝをてゝ浪ゝ出ぜてあげなどぶく医の通よ
うとく風流ある染をものゝ極まようき泥をあゝ部係よ

くらしたる過(いぐ)て遠(とを)かりく岳(だけ)とて息子(むすこ)をよび名(なの)たれば百
風邪(かぜ)おれば百(もも)まで方代(かたよ)、年(とし)くるまで生(いき)と云(いひ)たれば かしこ
ありさと初(はつ)三日(みか)宗(むね)ぬよ宗(むね)ぬ病家(びやうか)へ全(まつた)く悪(わる)き文(ふみ)のお
ひ来(きた)で今日(こんにち)大分(だいぶん)よろしく障(さは)りて乗(のり)まえの中一家(いつか)てま
ゐりさのとて祝(いはひ)せるものあるくて多(おほ)く酒(さけ)出(だ)して悪(わる)くなるべと
同(おな)じ右(みぎ)のあらほ下(した)くるよ牧(まき)文(ふみ)眉(まゆ)まいよせそれ(それ)おれ
おのをづ(おのづ)からあるとくちもるよりてたゞ病家(びやうか)ばかり強(つよ)
ざる本復(ほんぷく)をたゞさのじゃ

十八　ほうらんし山　流水

ゆうらんさん松竹の林まて落と竜と行会日出さんてゆうあ
ゆをび出日よりあるゆゆ竜ゆゆ出年ゆよりゆめお
まいたい出産(しゅつさん)ゆゆ出ゆゆ私ゆ先祖(せんぞ)も今年ゆ八十年ゆ長生
ゆ祖父(おじ)ゆ祖父(おじ)ゆ祖父(おじ)ゆ祖父(おじ)ゆ八代(やよ)ゆ代(よ)ゆ

詩の和歌なりき女死てゐんどのうきやだのたのうをゆ
くふ思ひなるふこうりの七系とのもの死てゐりれば彼おさん
大きなる怪びたえのうをを尋ねれば　七系イヤ　もうこうこう死
で一七日ようやうあの内どこの女帰やう連て居りたこと伴のようの
じゃあをゆへ　おさん　いよく〳〵ほんきたのうまあう遊廓よあり
行ますよ　七系イヤ　ゆうれい様のうのてら歩くまたようて福戸
さあへ死りんせ旦ゞ連ていてあろとゆへ　おさん　怪びあんまま王のおあ
幽霊死なれん大ほたくぐとおさんゞ新を出らんでてい様ゞ
叫りあ後よそふ死ゆうまんとうまあ後のうう

ドう脅もすうりとこるイとのじゃまよおのまゞはらをん
よ通ふ一日いうう服あり脅ひくそれゞゆうれんよあう
陰うとのゆれれば　七系　おさんゞ社をこ一コレおさんどの化
ものの様と云りんせ

十軸　春日　紙　味　瀬川

糸生のまつうとゞうこ寒をで寄合いあう夜もうまま来
まりあらとうゞ廣も金後ゆたとこ怪さなん亀
りう中ろ云合せ糸宿でもせうゞやあるまん皆く見ハ
よ男迎ゆあう皆く云合せ一ト連ようまりんおよゆさ

室引い宴(まねぼと)一匹(ひと)後(ゝて)あんとゝ(ゝ)べイヤ(ゝ)くそれハ
ようこちやあつゝ(ゝ)一匹(ひと)ゝ(ゝ)めきやちやゝあれはゝ(ゝ)ゝくゝ

菜冬(ふゆ)ゝ(ゝ)終

身上組建町家式目

富貴(ふうき)の地墓(ちぐふ)
分限(ぶんゝま)玉(たま)の礎(いしゝま)

此二ツの書は諸高人諸職人主人より来(くる)ゝ(ゝ)冬(ふゆ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)く式目(しきもく)ゝ(ゝ)
名(なを)ゝ(ゝ)てゝ(ゝ)ゝ(ゝ)で町家の身上を組建(くみたて)ゝ(ゝ)て家を建(たて)ゝ
ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)

十二　花見の句を　一橋

此法師天竺にけべて児乳母おとうぐんしてあるもあり
ともとそぶんせ法師めうがれ行中ようだ年出さあれば
花ぜめうを彼のちをえり抜れば人ぐ〳〵乳を見てアノ
おうだとのめりそ金太あだかりこれつて来てかうとい〳〵乳
母をうらびこうちまりたあどやといさ

十三　同　そぐ九　柳巳

右ハ君行考十きの性有

十四　自惚顔　秋月

近頃狂合も出来め徒の言葉人ある人と成く〳〵詩を
考そう此何の面白ひ考ますんを鼻〳〵やーてむりしなまいひあ
て弘法に形くよ雲嘯を二後よまんとしまうちくきるよ
四天王を猶何よまんとをまらくをなてソリヤあん
でもなんとのの日あるぞ考なるのぐらひ〜やあんヤア実
さ自是ようあるひの考ひて考るうをしびむりしん嘯でさ

十五　精進の宣長　下林

精ををこうひの人あり下女をよんでそ勢のらすさ者
ひ命うもせよとしびあ所なそ長ぢ今日ぬそうぞ人日で

おざりまんてチャや者六何日じや精を出じや ちんぐのイヤ
ぐふ六の佛の日でおざらまんちんや先のかたみの日じや
なんのまへの精をとるゆぐあるだんまん吟ふおまへくちゐも
よふ思ふてもおらぜまそ先のめーぐ稼こと出かまうよ要事
よくくまそ先のこの四けじやあくちおのじ振をこもれぐ
なのんぐ入窟じやそそまあうよ男をたぐをまーもおいけこと
ぐ為るら吟ふイヤサなんのおまをたぐしまそう保ちふへ
ぐふぐ精をあされまそイヤく吟ふイヤお精ををと
まへぬりんふ毎まぐ仲仕の布ふゆうひておくるもく

旦那さゐもくまや何あのまうまん志しおくさゐまう
ふ先の佛くとあのまるて六今の佛よさらりまん

十二六 南州ぞき（天竹考 廿二ともと） 六蕎

コレ母じや人あるまのうへぐをるこをあまさん者れあるる
のよまをうまうまをまるとおうのとこの中へまん売
ぐ為ことるら話よ遠者ぐのよゆまだぐくかものそうか
ちとあまさりれせめて人の仮吟ふ今ちなりとあまさぐふ
行の者ぐ思ぐなのーみぐや物ぐ成ふと見よりれよ
ふーこんおざらぬサまへをるれどちのるあまさぐまん

ひとりとたばこゞ法度なりゝ伊とさん書あの人の
いまゝまこの伊の色ゝ法度まあろぞのサたりとまふあゝ
ゝれどひとりとかゝとゝまこまゝ伊ゞんの伊の法度まありてなま
ふものゝサ法度ままゝあれてあまどうひとりまゝゝとふ
まヤレゝまゞ書伊の法度まなまゝぎひの子笠みのあひ
あゝビいと後まて申さけまゝゝまゝゝ近正一拍ひまゝまゝく
ゝたちのたゞ書ゝあさゝちものたゞこゞ姑母ひまゝと法度まあり
ゝゝゝぞふさゝ書とゝたゝゝゝ伊の法度まあり拍と
笠みけ近ゝまゝり合ゝそけゝふゞゝるゝまゝ拍ひまゝ本ゝフゝゝゝ

ものゝ中ゝ夕ぐれ何のそれぞ法度よなのろ

十七　仮名の去狂　角樋

右ハ君竹撰二の差廿軸の堂こ有

十八　寒　仗ひ　瀬川

双六好の人狂の外ゝ夕ぐれ負尾深ゝ有て布尾ゝ差ゝ
ゝの外れ居てにくゝ思ゝ山形でハ門口ゝとも出ゝれぬせ
めこゝ迄の一まゝ有ゝとも考えぬせだやと思ゝたゝべゝ忘れ
ゝ一風とあゝひ出ゝ山ゝ富の札を受て至ゝこゝゝ
ゝ六ゝ去ゝ日ゝ有れゝ差ゝ当ゝ考ゝて考えぬせだやとおゝもゝ

ゝ九ゝ考ゝ考ゝ考ゝ有ゝ有ゝ有

出て彼方へ入る程殺生をせぬまま日のうの前を行く
人のものをもるに対座する人林しく呼んで来たへ
通ずる嘗むべしと我れ云ふを和尚の情を感じ
入る西へ高うひそめて彼方へ行かれ事ども云ふ
めくまえの流れくと思ふ程を引て行くさ多とさんつ者さ
へりの石垣より出し流く石を拾ひ石の出りじと
実もあれこそ嘉うよくくとのみ俗説も絶ぬ世く内
よハ所るを見ん家がくよんの祈げ因る所の西へ出るるもか
あるを見げが流れ流れ流れとと彼へ石を押し出ち見へ

あの情をこ西へこそく石ろうあ也ども出るく中見
家にて彼をよび見の家の西へ殺生を斉浦へ行奥が流り
流れ流れ流れ流れ殺生はけ殺生はきの物ども多を殺
て体の為に色はむらいて初只今へ妻だけの出ん家が
れりくの出よりあてきくうなイヤヤ旦那さ多ぢちくうが
いなられがおまくうイヤくく続いて好合とあを意
てあけのまの家びり見者よ丁雑鶴さ出ろのぞきんて
コハ和尚やと作医て漁を流け丁雑中く旦那さ多とべ
京ろ石をもてひよまさう

立軸　　孰月はるひ　　春亭

第一人蒸溪家の西小川春吉帝はたらく毎日お其飯屋の
女代々のうちお其飯ばかりまんといつて孰月をつかう
春うでばかりまんとまたう月をたくう亦小川八義作さ
小百姓のやの男ら来りて何も中見ばかりませあるとう
孰月をたくう三人の喧嘩の家中ちらの四ら七十余の
かさ夜ばかりそひ月をあしてアく出いきちられいな出き
三ッどもの人をあんさ

蘭叢二の終

立春噺大集巻三

後素軒蘭庭撰

井戸　　巾武

鬼の上噺

ある所てまる鳥茅と出会　ある長い久しい先度さを
宵で嘉ふ樹の中て出ようふさ徒じや今日どこへ行
くふ何も用もおくに乳だらしよ出うけてオとさが見しどこへ
いても悪角人の浅ばかりて悪い話別をする者さ人へ
くのうちおの上どやと出ばまる見ても出ても沸あいるぞへ
ちんいのでも法へ延の世話よありまん

廿二

穩婆　貴投

えあげ婆を渡世とする中山の観音（高野）
てれいとりたのげ婆あを寄うだんいとしてまんぐ近年おかぢ高
麦ぐがたんと出来はて一通でハ中くはまぐぐが出来ぬ
ぢんぢ親まさ母の出産を蒙り（ほ）て中山観音初詣ぬり
たげ婆とゆ看板が出まぐりまんと三孔（てて）七日七
夜五夜ゆ世ちぐ由ぐる晩御産をギイとひらゆ老なまん
涙まちぐさ出ぢうまて持ちぐ孔ひものもお極ぢうぢり
おぐぐう小店いおろさめとの治ふ

廿三

猿引　猿

十七八

去大家へ猿ゆ一疋ゆ来り娘子の蕾葉ハちろ豆とせんとうちふ
而へ奥さ及因ののくまんの合ちりのぞ若くと板も来ハん
さんぢでんまと云られるを猿ゆ一疋ゆきちろ豆さる
竹ひろさくりエイ

廿四

赤ん坊　小子

悟空ノ二形ニ成ニ日ニ十五ニ成ル一人ノ悟坊誕生シニ行
しが咲ぢまさて其の外を世しをいさせしニ日も蕾ニ及び
くれべ部屋へ降り名翌ニ日又蕾ニ行てさのふ人ニ会堂を

いとゝ山ぶきよりはなさとりて行ゆくこゝろ地にゞ流すとなべて
ゆくへアノ志ゝんをうゞ行も拾ゞて本るゝ事ゝあるさよといふて拾
本りしものをうをゝびちらさゝ紙袋ゝとゝゝのをゞを一すぢ拾ゝて
切り入ありゝれば見へいつまるものとかのふゝろの手分をうへれど
志びりのくゝとり

廿五　毒がくゝとり　宝竹考 但十四番三有　朱櫻

ある遠志のおとあ云ひ奥し男のフト赤ゞ出来ゝし
かへサア大ゝの屋れを拾ゝ出てゝとゆゝうたゞよへ血ほ
とひとくゝとものをてのゝさゝゞ今ゝ青ゞ見へちゝうさんあと

世ゝのゝる味ゝ毒ゝうく我家を見へ出ゝよ公ゝてくまゝ　狭衣錦
燭をゝ入義ゝ拾ゝ閑ゝの夜のくゝさゝ公ゝしゝさゝゞうく　潮
くゝ氏弥の社ゝ本ゝゝ祇本の杉ゞゆゝ何ゞゆゝ
後ゝまゝゞれのゆゝさゝゆゝ汗ゝ出て消ゝ枝十日
志てゝ行ゝゝも家ゝ拾ゝ志なくいゝく見へ形ゝ
不ゝゝ十日ゝ出して玄関ゝ娘ゝ行ゝ公なくゞゝ
出ゝゝて立ゝられへ義ゝ後ゝ茶代拾て本ゝ

廿六　呆懐うゝさ　夏陸

大佛の呆帳の止ゞゝ手ゞゝといろくゝとゝ見へ内

文八郎がやとりの花宣ぐあのこハテめのそふかそふ計でハ
神さゝのゆうあイヤ大佛さゝがおりゝよりゝゝゝゝ分れだ
屋敷札を出しさがあるとかゝゝ文八仰山でぶぐりまん
ぐふぐ屋敷出て下さりませイヤよくゝゝゝ分よりとゝゝ

十七　珊瑚珠の蚊帳

春紅

蚊帳の汚の大王八月十五日の夜月を見ゝ出ゝゝ海
中大きゝゝだゝるゝゝて吸ゝゝゝれだ大王大ゝおとゝゝ
ゝゝ下ゝゝいたけてを見ゝせゝれば頑嶺を持ゝゝ拡ん拡
をゝゝて居ゝ

廿八　墓所の奥　　李備

西宮えびす宮家の沼造の旦那いまぐ新所の味を知うぢ出入の楽屋を連れ吉田屋方よりて吉文来社をひらめて大さうぎの宮中　夜参（風呂あるくれば亭うちうくぶ）よりぶんぶりをうけ上ようり上昭大さよ接場そんでいみ参ぶ

ふくぶとて賀るよ家ぶり吉よ旅宮ゆるれ今る所よ宮ん

いく波一壷所奥ーと作るぶ中と同人昭ぶれの

よ汁の完ぶこっあり

廿九　法　きくあく　　初別今井　正堂

是暖屋の代金せんぐるよんうり出と祝方のくまあいろく

と智略をめぐらし毎夜くく出るぶ夜くさあれば内出る

首尾もきのきりせんくなく悪会にて居る西よ降ぶ先

ようぶよ中来ぶ呼ぶ来ぶんと思ひ昭那さ及あぶ来ぶん逆

よりれ波一かけ亜ひ（だとだん）まりまぶとまの高

四よりぶ方ぶ呼ぶぐかんだんの沼よ入ぶこくよ仕て昭ぶの

入亜一丁呪を小ぶぶ（ほび）ぶぶよあぶ所の西らあと

家ぶび戻りおぶひトこくいーたっや来ぶと来て

ゆくよ起よぶちあるうよんうよあるハとあ体おぶ花ぶぶく

よカノぬう法の方（彷きさるかくさる国数も多く群も迴れど
過すの天加るで戸ガトにくく戸さたけば後室ゆメ対張と
ですりし枝を結ふくくと起さるをどこ森入で赤なをで起ど
見兆おく後室戸をあけよ呼れをを酒くさひ長
うまそうををうくソソリやさりまいをどや

三十軸　結撥方法遊仙　鳥二助

釈迦法佛の御月の退夜あれをとて極楽せんのんぐ
さりく多紙をのの天乗漢中より中金て巳ようど
おく彼佛ほさり遊方せん引法をて来原あうちや

ほをうと九ふの空浦をちらしおのく蓮華の座席
をのかけ四べ七宝をちうだあう長盤ゑ具のうつ八百
味の飲食を堆く彼くうりのくだんの品品取まかり出て
扨おのくいづをもさ多をヤ入てまのつゆを呑うまん光と
ヤも釈迦如来ゑびこ流生の人乃遊名くさ多や我ゑを
うやまうくようのて法光を極楽まんやういてまんホニノ
見がまおをこ教悲謝波でおざうまんてや見入れあんさり
の通りと猛ほむひ合掌ー　ちやかむよせそ人者をを乃
人乃世界と表りしてこ系くちろうくこたけ　ごいごうくと

しゆうくんてきにあを標海あれど天のさんごこまあを
金をひさげよつをておを出沙羅林こけと世こさびらのこと
ものサア おきつも花けあること及び冷々 あの岩とおぞ
おさ法をこうめさくとゆるぐ山こうや家あのう地ん
いとおど殘けべつ群濱くら鄙して出のくさのこおさぐご
なをひそをにぞうり速根とるのじや

蘭巻三の終

左春嚮大集巻四

後素軒蘭庭撰

三十一 通り 一 編 寓居

右八若竹考三の巻 竹軸の堅こ有

三十二 道心者の悟道 布生

右八若竹考四の巻 ホ二番の巻こ有

三十三 芝の苗 代 清井

げんぞうの芝を毛ぞんあり 帽子の赤こまりて正月の
逸礼こ芝代ゴ刈ーら れど淡八ぶーぶ ぞ結ーあるぬと

品案して案て近所の足袋屋へ行内より出たるうり出て出られ
う行ぢ内でおざりまんぐ アイヤ足袋ぐさと足袋いシヤが
おまぐのでハあへ友達よ新まれ志ハ價ハ糸参よハ
ひそらんとてえりて出てやされまんうく アもまの出徒人名ぐべ
いのあらたいさ一位考よシテ足のすハ何ぢとでおざりまんぞフシ
足のすぐう足をさしてと足を出ーさ

三十七

寄 題どや 立 臺

正月十七日より大坂のあさ泥八尾の泥棒ぐ宝船の入佛あり
別張あさおそく成り日くれて寺へ入こせぬハ表ものぐ集て

切出入佛ハあこびよあのあどやとの寺人のいく イヤ板よあの
題どやよ寺人のいく イヤく端入よ寺あどやよハどしてハテ
抱打ちもして出掛ぐ来さ

三十八

花見の古哥

天王寺 井川

去おくさ夕あまさ姫をは出花見よりうよさわよ寺しで
今をさうう行きおそうあ眺めさてく見ようおうでおあくう
姫さあうでおざうまんおその音ようまおざうまん一首出ぬて
も抱ぐ毛 おくさ夕 ナ、一首うもんぐうんの 姫 何と抱ぐはてさな
夏夕 月ようさせハ柳さうをおさ庫ぐて都をそるのはさう

やり　ぬき　文八あり　ろそふ　ふ　あ　ま　ぬ　ぐ　ら　ま　ん　ぐ　ま　し　柳　八

おぐりまをあぐ　夏　まるとと　ろ　り　ま　を　ぐ　縁　を　月　や

三十六

帳屋の行親仁　浪雨

帳屋さん　来り　美賀帳　あつらへ　来る　帳屋　親仁　中上　かさ　越ま

ちよう　ち　イカニモ　〳〵　買と　ぬ　て　ま　ら　ま　も　親仁　中　八　あ　ま　さ　八　ど

こで　ぬ　ぐ　ら　ま　た　と　ら　ふ　拾　ま　八　に　つ　だ　し　ま　と　ま　そ　こ　拾　石　の　永　明　屋　と

ひ　ま　親　仁　中　八　そ　ん　ま　ら　滝　屋　さ　ま　ら　と　ま　ふ　イ　ヤ　〳〵　大　佛　屋　で

ま　る　と　ふ　親　に　あ　ま　れ　新　で　い　ふ　ふ　大　佛　ま　ら　八　な　ま　ら　ま　ま　ん

三十七

ちり切草履　大梁

揚屋所のたそうれ　法足羽二寸の　寸　小袖　ま　ち　ら　め　ん　の　た　ま　ま　ま　八

中　ま　教　を　張　一　業　内　も　ま　く　養　所　ま　と　ま　り　ま　す　、　久　〳〵

ま　あ　ら　ち　養　而　の　ま　ま　一　九　新　所　八　回　く　ま　ま　昂　ど　や

ま　ま　七　八　ま　る　ま　八　ま　ら　後　く　も　陸　ら　ま　ま　ん　ま　ら　と　ま　ま

ま　あ　ま　ま　中　ま　ま　出　ま　八　出　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ま　ま

一　ま　ま　中　ま　八　ま　ら　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ま　ま

ま　ま

あまく浄さんでありまそとは　ちんと　そえん　おまへの　お客さう
と　ゐる　今　孤　姉　ぎ　れど　ぶを　おづめ　同　合　を　内　彼男　帥
をめぎてう　家く　遠　只　今　大　の　まま　仏　を　殺　ほて　者で
ゆきりまん

三十八

當世ハ見く　結く

大坂の人京　丹　中　あ　て　ぶり　大　佛　上　寺　殺　迄　る
人　る　今　年　あ　さ　の　宿　が　有　と　掛く　れ　が　皆　何
でも　ぶ　ん　ゆ　じ　や　と　大　坂　ハ　ひ　る　及　び　迄　を　も　寺　ち　と
ま　ぶ　め　て　ま　ほ　て　る　俄　よ　お　あ　あ　れ　さ　ば　て　る　事　で　ぶ　り　ま

ちろぎ　去佛　サア少くて左も已も迎年の富よりして余程の
極を去さ迄冥性でもして凡てのところ不されで今の世界へ懐
中を見くれていろぬ

三十九　雷の子　瓦香

家よ赤どき去金盛四の達人の剛りる素のあり度るを悦び
ひとりろ素の子ゆくと私ィが去て凡てくれと居たしまある日後
ろふり度の客あげやで達と一敵して先去まとあをこ山る
少迄へ年礼よそ孫ゲをのをあらて去さ赤おさのほーゞ出るあく
なりの子を今一つ行くへ因者をよる去て見てくこ紙今はいた

去さ支へ年時一年分せておくれたいあるうこりの行ちゃんな
あるゞ年ハ一の品ちしとくの因よて去ゞくいれ一ノ月因
よ去年の神と去ろくフト花あるをあけさいあるそ花去ろ
そうあとこ平ところを油ゲ油よ去ををたくれ去ゞ年止
なんと去ろと達年常をくさたゞおろの出りを見れへアし
月人去れ瞬よ去ゞ行ている見あり見なのへってちよこゞ
いな今切ゝだなる

四十軸　鏡のなぞ　大梁

去ゞ面の富家の娘去あ去せんと濃墨とり色流を

指何ら有りしかん母親のまくらひざ枕をさかさん仏ひくみの
ふるあう門のしまを陽げ死る稲のたかざうり月をるをまて
じやぶざりまをあぬちと月をれば母あや有りほどおきまこも
まくしかん八なあやまやる姫入のにもせ合られとたくおやへの
うくみに上をあうまうらぶうり月びれちと表てまんやく

立春噺大集巻之四

後素軒蘭庭撰

四十三

南ど赤ひ　若星

若きその三人連れそおどもの呉屋へ接びに行いろくの
ぶくやだ店呉屋おやま中居親ゑるのあか勤いうちち
一人りのひ番ゑ法頂子ぶろ呉の細とい会ゑ子知て居るう
ヲ、知ってゐる何ンと考さあのの小呉号ハ狐むどやがどふ考さ
そのう出ぶあるこハナアニあ母うらんん今のげいるよ呉のよ
ぶきぶ〜もあるとうこのいあ狐おりやられがたあるよけらをてうの

ぢやサア おさもさかうと思ていろくと ゆて見てさぶ宝のむ
の宝も あんそふいや おひ合をさるのぢをたなそびやらんぢ
いてうどや

四十二　白ひる　一仲

有ル 藪 女 ちのび男あり ちう毎夜 撲町の 媛 を越へ れを
ぬきひ通ひ しぢを 夜 いりもの 寝 り 閨 ゐを ちのらい 彼 藪
女 まち 居 ちう ゐるよ れ 前 を ありの 猫 彼 媛 を 越 ちを ひ
ちひて 夜 ちぢ ひと 遠 入 ーぢ 藪 女 入 ちを ひ 男 と おも ひ 今
有 ハ 出 ちへのと ちを 猫 ぢ ちら ひて ちらと ゆけ ハ 藪 女 てア

灯を消ぬぢちを

四十三　絵合札　子代

年の比めと 福人 遊 絵合 てさんでを引 出 極ひあり 京
の大佛 おを ちを ゆ ぢと ありて 出 あて び ゆく あり て 福人 遊し 合
り 福人の 作 よ ハ 皆 代 宣 長 ハ 大佛 より おこり ちる 金 祥
素人の こせ よ 神 ちる 遊 の 中 ハ 遠 入 ー ちを ひく 百 遠 と 作 おれば
大佛 ぬ ちる ぬ 絵 で ぢ ろ く と ちの ん ま り ちを ひ ぬ な ち を ひ く 札 を
引 て 居 ち ふ

四十四　椎量ちを

君 州 考
四十七 ふ 有

[illegible]今盛のたまゆらう森の長うつゝもかくしさま及樣
も所もたへなる者おさまの花いろの[illegible]赤なる者又〻数を盛も
まりまるるとのゝ器[illegible]の花〻たる姿数おく出て来
よむしねも所も浦ハでおそれ居る彼ものさをく〻よりてさ
のゝかむさらぬひそ戒くハ[illegible]り〻異ひたゝ[illegible]の精く
所の花きいろのあきハ所ちゝくのせゝこまるあくおそろのせゝく
ぶんぶりとて目も耳もおさハ嘴の精ゝ外中に間本の精
中さのち甘酒の精までのうるゝ所ゝさこゝ分みおくお
所びゝ蛙〻れど今盛も出客ひのてのゝ[illegible]れど所[illegible]

客の精がおゝていの中〻たゝめ中〻で酒中〻めゝのとのゝをころ〻
ゝ[illegible]の者ゝ[illegible]ふりの羽織[illegible]牛の[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]
ゝやゝりゝ出るゝ[illegible]客の精ゝ[illegible]ゝ[illegible]
敷を月れびもろ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]十ゝ

戒[illegible]門

[illegible]月十一日去町[illegible]門今宮[illegible]ゝ[illegible]戒[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

月しもそうなの相撲で大分強の人げつをとってうれしがるまうけて
ほうびる所の人が富貴さんでやう富貴さんでやう福をあたへてく
さの張りをつけさせて呉れいとたのまんをのはしをなんで七ツく
弾ずやをて張よく張りの所るものの所ばらをとるとてもアノ数万人
が教ゆずやをよりのて何うかまをとおもうくまを良らん
ゆどをせうと思ふる戎たん多くく皆相撲又排とと延てをく

にゝ十六　田月の富札　板平

何を家業も為られどけ仕仕せを有さ道自屋迄ひとを富宮
のれを行所まをべ十一日十所出屋五日人数大社参ぐ一の宮

実母のたりがてゝあるとて仕ゑうの高のれやうぶのうの文の色れの
教もおしだりなるべき歌をうらり実人歌屋を詠ぬ色に秋の月の
よて八月さ屋と問人 序を 秋の月の れを変て行よ月まを
屋とい屋に別又下りと 秋を一てあちの れをぞせて秋の
月りとい一月をを屋変て 秋を まぐれよくれば実人いう
廿月の富れい書れてあれで右道を屋のりやまりて秋
の月を問をうちんじや

四十七

義の出来会

瀬川

第四の夜実ぶりを月とめて抗まくあをを秋ひ屋を

見るべしとたの色にを何ぶ見る秋もくいろくの義二三十一
も見てりり聖形あをて我ぶりあられてあるりの義報
屋いつをきくとり歌りを色いろく外を掛られぶフ おろ対
神仏の大恵天くむへ何とぞ夕アの義の中いづをを桜今
の義じやれ和せ下されと一位よいのりられべた恵天をを
たぶ行ぐまを屋へ枝くを見はまり入をりめのそふを京
人合でを京しも和をり

四十八

お伊と分別

武張る村の娘は角芝居の小川を泳をて吟を書見をあり

侍女よりたづねば侍女それへ案内をいたすと法人合さて春来りを
ぶことはけて結び出さくさのそりとあるく案内へ連れ入るが案内や
の如房見たかあつらへんかと思ひてと又侍女小あつらへてふ
家へ出仕したかれのうでもおざんせあアノ角の小川を渡りて
おくれたのちの出羽うんさ女ぐたてんさがをておざる其ハ首尾
人法を見て来さと又侍女こまりたちあとの小川を人をつ
ておくをといく猪女へ立て申のて仕ゆり小川を入いて来り
出しさが織よ気あるう横ちあるめてきうのさ法をうの来る
ゆりかて見をといふてぶざりまんと又侍女ん来るぶやナヤ来り

おく来りて首尾して来さものうたんハ出をれるこひナニト
ぶでを結ぶうんのさまかうと又首尾うろ出てはたりまを代道ゆる
波者でなんぐ小川よいさうたしかを見ぶぶ法見ハぶふでお
ざりまをせうてアはうの人さ女法家ひをれまをんあるはぐ奥
ひうはうの人さ女おはを拾ひをとをりのうをりのくはををはをさ
をのマア今日なを西の小川よりハ仕さ人をとおはをれまをあると
又侍女ん人町の出方あら女来ざうろひ

巳十九　元文　隆子

ちんぜの人をりたくぐと巳ハ人のををはうんハ年セーうの

世をたぢろぐ人と安房の鯨をとり
[illegible]の出るが日うぞかさ寄て涙雪の漆こたく一帝しるるが
森ざめよ色〳〵かさを見出かく安んあ〳〵の山の風の志
ざり志のおぢく〳〵よひとりぬも待人をたぶ安さられぬ浦の方
うらとぞ安ろう

五十軸矣尾

仙人 掏うろう

安樂

去る陸雅人去るが若を信を殺されて仙人が対の和と
安るよ〳〵仙とそよ仙人を法〳〵志のといろく立支世と
雅んまのとそじよ八仙人をほじ対の和よ〳〵出来〳〵が

掏まよりう若信掏舞をうさされ侍く寄来ぶあり
正右のらんまを見掏く〳〵足るまるらんまは仙人も宮て
ミ多く名ぶざざるうと問ぶ亨ミ名行みあく名が
ぶざる生んが対よ仙人名案の仙人なぞと六人と何ま名仙
人の名を見八詩り永人八名八何とやと三ぶ詩り天人八
彼日あさ仙人日くうり仙人でぶぶ仙 紫美ふの絶

嘶清書會頭

次共ふ所二十月八百五所筋南八

高橋 紫木

心神楷悟旁所筋ミ十東京本所

御書物所

澁川久藏

黄相新

安永五年申三月

大坂

道頓堀下ったわたしもの
川ったち巳ハまん筋ふ、入
彼岸せんざんの本筋西入
今橋せんざんの本筋東入
西横堀新地二丁目
松や町まげる町筋ね、入
さとだ小路町角
九条ちでんたくみ
谷町内久ほじ町筋東入
あべの橋かやち町筋西入

山田屋久兵衛
橋屋忠兵衛
大和屋孫兵衛
地屋三郎兵衛
九屋平兵衛
大和屋吉兵衛
海老屋勘兵衛
伏見屋伊兵衛
板木屋平八
板木屋伝兵衛

書林

板木細工人